

まとめと謝辞

21世紀鋼構造フォーラムの設立の当初からフォーラム活動に参加した。鋼構造研究分野での活気がないと感じていた時期であったためだ。また、鋼構造技術で建物の骨組みは構築できるが、ひとが使う空間は、床や屋根や壁など鋼構造技術以外の分野、非構造部材などやその選択をする建築家との連携が不可欠であると感じていたので、フォーラムがよい機会を与えてくれるのではないかと期待していた。

フォーラムの設立とともに、第一期の活動として、シンポジウム「21世紀、鋼構造技術は何ができるか」に向けフォーラムからどのような提案をするかが議論された。「生きる」、「進化する」、「解き放たれた」鋼構造と言うシンボリックな概念を掲げて検討しては如何か、と提案した。鋼構造と言えば、ラーメン構造、ブレース構造、そしてシェル構造と相場は決まっているので、そこから発想したのでは21世紀に相応しい提案などまでとても到達できないと思われたからだ。幸い、若手のフォーラムメンバーが、積極的かつ自由な立場でWG活動に参加してくれたので、上記シンポジウムにおいてフォーラム提案を行うことができた。

その後も、第二期、第三期と第一期で提案されたテーマを掘り下げていく検討をしつつ、具体化し、成果とりまとめを行うことができた。レポートの形でできあがった成果以上に、それまでのプロセスでの意見交換を通して、若手の研究者、技術者、実務家間のネットワークが密となったことは、将来、必ずもっと大きな実を結んでくれるものと考えている。

一方で、6年半のフォーラム活動を通じて掲げられた提案の多くは、未だ具体化に向けて検討が開始されていないものも多いが、将来、新たな提案のヒントとなる内容を含んだものであり、活動の足跡は後世に残す価値があるものと信じている。

本資料作成の提案から極短期間で建築研究資料としてまとめることができたのは、各テーマ毎にビジュアルなレポートをこれまできちんとまとめてきたWGメンバーの努力と、建築研究資料の全体構成提案後、師走そして大学入試の忙しい時期にも係わらず短期間で各担当原稿の執筆をして頂いたフォーラムメンバーが居たからである。

最後に、発起人の山内泰之、藤盛紀明、作本好文の各博士をはじめ、御関係いただいたWGリーダーの方々、国土技術政策総合研究所、建築研究所、大学、設計事務所、建設会社、鋼材メーカーの方々に謝意を表します。また、事務局として縁の下からフォーラム活動を支え、また、本資料作成においても過去の資料の収集など日本鉄鋼連盟の糸野徳一氏には大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。